

「グローバル人材養成」のための一考察

— CompTIA CTT+ ホルダ研修 FD, 英語による英語授業, 「モデルコアカリキュラム」のための
英語プレゼンテーション演習, 図書館における英語多読図書 に関連して —

小林 貢

A Study on Human Resource Development of National Institute of Technology, Akita College: On CompTIA CTT+ Holder Training Course FD, Teaching English Class in English, MODEL CORE CURRICULUM of NIT and English Extensive Reading in School Library

Mitsugu Kobayashi

(平成 29 年 11 月 30 日受理)

It should be taken into consideration that CompTIA CTT+ holder training course FD, teaching English class in English, MODEL CORE CURRICULUM of NIT and English extensive reading in school library could be the essential tacklings for the human resource development of National Institute of Technology, Akita College.

The purpose of this thesis is to suggest an approach to improve some spontaneous English abilities for our students and teachers by applying the ways of CompTIA CTT+, Learner Autonomy and MODEL CORE CURRICULUM of NIT to human resource development of NIT, Akita College.

We have been making many attempts to establish students' voluntary English learning and let them know the world-wide point of view for engineering design. If they keep studying their specialities autonomously and trying to communicate with foreigners in English, they can contribute to the world as international engineers.

Keywords: CompTIA CTT+ holder training course FD, Teaching English class in English,
MODEL CORE CURRICULUM of NIT, English extensive reading in school library

1. 緒言

「本校の英語教育について」の特色ある取組として、以下の3点を挙げる。

1. 本校の英語教育においては、英語学習に対するモチベーションを高める手段の一つとして英語に関する資格試験の受験を奨励している。その経過として本校は平成 11 年度から平成 19 年度まで、9 年連続して実用英語技能検定奨励賞に、平成 20 年度には優秀団体賞に、平成 21 年度には優良団体賞に、平成 22 年度及び平成 23 年度には奨励賞に、平成 25 年度においては優良団体賞に、平成 26 年度は優秀団体賞に選考された。また、平成 28 年度実用英語技能検定において優秀団体賞(受験率伸長差部門)を受賞した。

2. 本校は、TOEIC Test に対して、積極的に授業において取り組んでおり、その成果は、TOEIC スコアにも現れている。過去における TOEIC スコアのついては以下の通りである。平成 18 年度において専攻科の評価指標である大学院における TOEIC 平均スコア 479 点を超えた専攻科生は 7 名おり、最高点は 635 点であった。平成 19 年度の大学院における TOEIC 平均スコアの 484 点を超えた専攻科生は 5 名おり、最高点は 660 点であった。平成 20 年度の大学院における TOEIC 平均スコアの 491 点を超えた専攻科生は 6 名おり、最高点は 745 点であった。平成 21 年度の大学院における TOEIC 平均スコアの 494 点を超えた専攻科生は 7 名おり、最高点は 855 点であった。平成 22 年度の大学院における TOEIC 平均スコアの 507 点を超えた専攻科生は 7

名おり、最高点は 720 点であった。平成 23 年度においては専攻科の評価指標が大学院 4 年の平均スコアに変更となり、平均スコア 593 点を超えた専攻科生は 1 名で、最高点は 620 点であった。平成 24 年度の大学院 4 年平均スコア 614 点を超えた専攻科生は 5 名で、最高点は 700 点であった。平成 25 年度の大学院 4 年平均スコア 594 点を超えた専攻科生は 2 名で、最高点は 615 点であった。平成 26 年度の大学院 4 年平均スコア 605 点を超えた専攻科生は 0 名で、最高点は 570 点であった。平成 27 年度の大学院 4 年平均スコア 587 点を超えた専攻科生は 1 名で、最高点は 640 点であった。平成 28 年度の大学院 4 年平均スコア 622 点を超えた専攻科生は 2 名で、最高点は 640 点であったが、同年度において TOEIC スコアによる学生表彰は廃止された。平成 29 年度の大学院 4 年平均スコアは、636 点であり、平均スコアは年々上昇する傾向にある。TOEIC スコア 636 点を超えた専攻科学生数および最高点は、今年度の TOEIC Test が全て終了していないため、現在、未定である。

3. 平成 21 年度高専改革推進経費採択事業（「国際性の向上に関する改革推進事業」予算配分は 2 年間で 1,940 万円）として、本校の人文科学系（英語）の「国際的な情報発信のための e-learning による人材養成プログラム」が、高専機構から選定された。プログラムの概要は、「e-learning による英語学習に加えて外国人による専門分野に関する講演会により、TOEIC に十分対応できる国際的に活躍できる人材の養成を図る。そして、情報発信の推進のための国際教養大学（以下、AIU）Dr. Kirby Record 先生によるライティングのプログラム『情報発信のための Lesson』の演習を行うことで、学生が国際学会等で専門に関する発表をできるための英語力の素地を養成する。」であった。プロジェクトの成果については、平成 23 年度に高専改革推進経費事例発表会（於：鹿児島大学）において発表し、『文部科学時報 3 月号』（2012 年 3 月号）に掲載された。

AIU との連携については、平成 26 年度においても継続しており、6 月 23 日に「グローバル人材養成講演会」として AIU Dr. Darren J Ashmore 先生による英語による講演会「人形芝居」を実施した。歴史の中において、人形は聖（神）と俗（日常）とのゲートウェイとして機能していたという日本的な「汎神論」に基づく考察を講演いただいた。そして、11 月 19 日には 5 年物質工学科生物コースの「タンパク質工学」において授業担当教員と AIU Dr.

Andrew Crofts 先生による DNA の構造と機能についての英語授業を実施した。

平成 27 年度においては、7 月 22 日に「グローバル人材養成講演会」として AIU Dr. Patrick Dougherty 先生による英語による講演会「Describing Japanese Customs in English」を実施した。内容は、「日本文化」と「イスラム文化」との比較を含めた異文化理解についてであった。そして、『グローバル人材養成授業：英語による専門授業「タンパク質工学」』については、平成 27 年度の本科 5 年物質工学科生物コース学生対象の専門授業である「タンパク質工学」において、ネイティブの教員である AIU Dr. Andrew J. CROFTS 先生が、DNA の構造と機能について平易な英語及びクリッカーを使用したアクティブ・ラーニングを実施することにより、学生が国際学会等で専門に関する発表をできるための英語力及びプレゼンテーション能力の素地を養成する授業を平成 27 年 11 月 16 日 7, 8 校時 301 教室にて実施した。4 名の教員にご覧戴き、学生の感想は概ね好評であった。AIU との連携は、今後も継続する予定である。

これらに加えて、英語力向上のために本科 2 年生をシンガポール語学研修に派遣しており、それに関連して、「英語による英語の授業」を本科 1 年生および専攻科 1 年生対象として、本校教員が実施している。また、ベトナムへの教員を派遣し、フィンランド大学からの学生を受け入れることに加えて、例年、専攻科学生をフランスへの短期留学に派遣している。

そして、教育能力の向上のために種々の資格（CompTIA CTT+, シニア教育士（工学・技術）、TKT Module1 Band4、英語教授法認定資格 CEFR B2、Cambridge English Teacher, Teaching Speaking 等）を取得した教員は、それに関連する FD を実施している。

2. これまでの CompTIA CTT + FD 実施について

アクティブラーニング（以下 AL）とは、学生による「書く・話す・発表する」などの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う能動的な学習であり、CompTIA CTT+（以下 CTT+）は、AL による「学習者中心の授業」が実施できていることを認定している国際資格である。

高専機構は、学生への教育のみならず、教員の自己研鑽への取組である CompTIA CTT + の取得を高

専教員に奨励している。筆者は、私は平成 25 年度に英語の授業により、CTT+を取得した。

平成 26 年度において CTT+を援用した授業を実施するために「英語授業講義力強化プログラム FD」を 5 月 23 日（全体概要及び日本語授業について、参加 32 名）、6 月 13 日（英語授業について、参加 25 名）、10 月 7 日（各学科代表教員 4 名による英語による専門授業発表会、参加 35 名）に実施し、上記とは別に、「アクティブラーニング FD 研修会」を平成 27 年 3 月 19 日（参加 23 名）に実施しました。

平成 27 年度においては、新任研修を兼ねて、CTT+を援用した授業を実施するために「英語授業講義力強化プログラム FD」を 7 月 9 日（全体概要及び日本語授業について、参加 10 名）、7 月 14 日（英語授業について、参加 13 名）、9 月 28 日（前年とは別の各学科選出教員 4 名による英語による専門授業発表会、参加 19 名）に実施しました。

平成 28 年度においては、「CTT+ホルダ研修」に参加した後、仙台高専における「授業改善研修」にも参加し、平成 29 年 3 月 24 日に 70 分の時間を戴いて、8 回目の FD(参加 17 名)を行った。

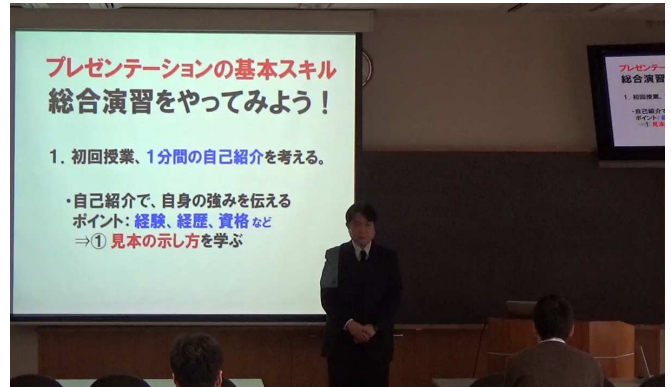
3. 「平成 28 年度 CTT+ホルダ研修」FD の意義

文部科学省における指導要領の改定案（平成 29 年 2 月 14 日発表）は、「何を学ぶか」が中心だった従来の指導要領を転換し、「何ができるようになるか」を明確にし、そのために「何を」「どのように」学ぶかを明確にした。答えのない問題に挑む力をつけさせるため、先生が一方向的に教える形ではなく、討論やグループ活動などを通じ、「主体的・対話的な深い学び」への工夫を求めている。

アクティブラーニングの授業のスキルを習得し、活用できることを目的とした「平成 28 年度 CTT+ホルダ研修」FD におけるポイントは、①「プレゼンテーションの基本」、②「質問とディスカッション」、③「目標明示と動機付け」の 3 点である。上記の 3 点について実演を含めた FD を実施した。

具体的な内容としては、①「プレゼンテーションの基本」としては、姿勢、表情・アイコンタクト、ジェスチャー、間の活用などの「見本の示し方」を学び、初回授業、1 分間の自己紹介を考えてもらい、経歴、資格、留学経験などを使用した自己紹介をペアで実施するとともに、前で発表をしてもらった。以下は、その際における筆者が自己紹介の「見本の

示し方」を実演した様子である。



②「質問とディスカッション」は、学生に興味を持たせ、考えさせるスキルである。今回は、秋田高専の校訓および教育理念について質問を行った。それに基づき本校の存在意義についてのディスカッションを行った。それは、AL の期待効果と結びついていて、(1)学習到達度の向上、つまり、科目内容の知識を理解するだけでなく、習得や活用ができるようになること。および(2)汎用的能力の育成、つまり、知識の習得や活用過程を通して、主体性・表現力・協働性などの能力を高めることができる。言い換えるならば、「質問+ディスカッション」で、動機付けとして、学生の参加を強力に促せることを確認できた。

③「目標明示と動機付け」については、授業で動機付ける将来を提示し、a.経験に結びつける、b.場面を設定することで、目標に対して学生を向かわせる動機付けとなることを演習した。具体的には、「1. 目標明示」として「英語が話せる高専生になる⇒将来の進学・就職の機会増となる」ことを前提として、「英語が話せるようになりたい?」という「2. 全体質問 (Yes/No 質問)」をしてから、全体質問として「英語が話せるようになるためにはどうすればよいか?」という「3. 全体質問 (オープン質問)」をしてから、ペアを作りディスカッションを行わせ、「外国人の友達を作る」「毎日、英語を読み、聞き、話す」などの答えを出してもらった。それから「専門科目についても英語が話せるためにはどうしようか?」と追加質問を行い、「4. 動機付け」として、「いい方法があるんだけど、何だろうね。英語プレゼンができると、将来、役に立つんだよ」と方向付けてから、本科生の英語プレゼンテーションコンテスト・海外語学研修の映像を見せて、動機付ける。「目標達成のためにがんばろう。」と呼びかけるモデルを示してから、演習をおこなった。以下は、その後における CTT+を援用したアクティブラーニン

グを活用した授業実施についてのグループ演習の様子である。



この FD はグループ演習を具体的にやったことが、質疑応答の時間における明確な意見交換に繋がり、AL の理解と実践の意義ある機会となった。

4. 「英語による英語授業」の実施について

平成 26 年度より実施している「英語による英語授業」には、文章の意味を確認する時には、コミュニケーションがうまくいなくなる問題があった。この問題を解決するために、平成 27 年度より平成 29 年度に実施した「英語による英語授業」については、筆者は、本科 1 年通年 英語 I (平成 29 年度より英語 I A) において、週 1 回 2 時間リスニングを担当し、教科書：「スヌーピーと学ぶライティングとリスニング LIFE WITH SNOOPY」南雲堂、単語集：「カラー版 TOEIC テストにできる順英単語」中経出版を使用した。「LIFE WITH SNOOPY」は、GRAMMMAR FOR WRITING, SENTENCES FOR WRITING, ENJOY SNOOPY, GRAMMMAR CHECK, WRITING(1)(2), TIPS FOR LISTENING, LISTENING(1)(2), SPEAKING の項目から構成され、文法、作文、リスニング、スピーキングにおいて演習形式で「英語による英語授業」を実施するには特に問題がなく実施できる。ただ、ENJOY SNOOPY における漫画の意味を確認する際においては、コミュニケーションがうまくいかないこともあったので、その後においては、質問をすることでその問題を解決し、「英語による英語授業」の実施を継続した。因みに、平成 27 年度における 1M 英検準 2 級合格学生は 42 名中 3 名、1C 英検準 2 級合格学生は 42 名中 5 名であった。平成 28 年度における 1M 英検準 2 級合格学生は 43 名中 5 名、1C 英検準 2 級合格学生は 40 名中 3 名であった。また、平成 29 年度における英検 1 回目完了時における、1

組英検準 2 級合格学生は 42 名中 3 名、2 組英検準 2 級合格学生は 43 名中 3 名、3 組英検準 2 級合格学生は 42 名中 4 名、4 組英検準 2 級合格学生は 42 名中 1 名である。

専攻科 1 年後期 応用英語 II において平成 26 年度に実施した「英語による英語授業」については、教科書：Preparation Course for the TOEIC Test Akira Morita 他 SEIBIDO、補助教材：「即戦ゼミ 8 大学入試基礎英語頻出問題総演習」上垣暁雄編著 桐原書店を使用して、授業の進め方として、「演習形式で行い、2 週に 1 回のペースで補助教材による単語小テストを実施する。尚、E-Learning は課題及び小テストに使用する。試験結果が合格点に達しない場合、再試験を行うことがある。」に基づき実施した。評価方法については、「合格点は 60 点である。後期試験結果を 60 %、単語小テストを 10 %、「TOEIC テスト演習 2000 コース」小テストを 10 %、モデルコアカリキュラム (必須) を 20 % で評価する。」に基づき実施した。これについては、専攻科生 1 年生が対象だったこともあり、特に大きな問題はなく実施できたと考えられる。平成 27 年度および 28 年度は、教科書：Total Strategy for the TOEIC Test Akira Morita 他 SEIBIDO、補助教材：「即戦ゼミ 8 大学入試基礎英語頻出問題総演習」上垣暁雄編著 桐原書店 を使用して「英語による英語授業」を実施した。平成 27 年度および 28 年度の評価方法については、平成 26 年度と同様であり、ルーブリック評価として、到達目標 項目 1 としては、「国際的に通用するプレゼンテーション能力を修得するための英語によるコミュニケーションに必要な基本的能力を身につける。」ことを目標とし、到達目標 項目 2 としては、「自分や身近なこと及び自分の専門に関する情報や考えについて、200 語程度の簡単な文章を書くことができることに加えて、自分や身近なこと及び自分の専門に関する情報や考えについて、前もって準備をすれば毎分 120 語程度の速度で約 2 分間の十分な口頭説明ができる。」ことを目標とした。平成 27 年度および 28 年度についても、専攻科生 1 年生が対象であるため、特に大きな問題はなく「英語による英語授業」を実施できた。平成 29 年度より、WEB シラバスとなり、教科書：ALL-POWERFUL STEPS FOR THE TOEIC LISTENING AND READING TEST Takayuki Ishii 他 SEIBIDO を使用している。WEB シラバスの評価割合は、試験 60%、発表 20%、その他 20% と記入されているが、シラバスの他の部分については、

平成 28 年度シラバスを踏襲している。専攻科生 1 年生が対象であるため、今年度も特に大きな問題はなく「英語による英語授業」を実施している。

4. 『「モデルコアカリキュラム」のための英語プレゼンテーション演習』および 特別研究発表会

『「モデルコアカリキュラム」のための英語プレゼンテーション演習』としては自学自習時間を活用することで、「自分や身近なこと及び自分の専門に関する情報や考えについて、200 語程度の簡単な文章を書くことができる」に加えて、自分や身近なこと及び自分の専門に関する情報（例：実験成果など）や考えについて、前もって準備をすれば毎分 120 語程度の速度で約 2 分間の口頭説明ができ、且つ、相手が明瞭に毎分 120 語程度の速度で、繰り返しや言い換えを交えて話し、適切な助言、ヒント、促しなどが与えられれば、自分や身近なこと及び自分の専門に関する簡単な情報や考えについて口頭でやり取りや質問・応答ができる」である。これらのことが達成できるように平成 26 年度においては、専攻科 1 年の「応用英語Ⅱ」において、「自己紹介」及び「研究内容」について演習させた。受講学生 22 名中 21 名の完成した内容については、パワーポイント及びビデオに記録した。この演習に基づき、平成 27 年度特別研究発表会において専攻科 2 年生となった 21 名による 2 分間程度の英語による発表が実施された。評価方法におけるの具体例の一つは、総合評価＝作成論文内容（序論、目的、手法、結果、考察、まとめ・結論、参考文献）（60%）＋プレゼンテーション（発表、提示資料、質疑応答）（30%）＋公開状況（10%）であった。平成 27 年度「応用英語Ⅱ」においても、専攻科 1 年学生 22 名を対象にして、必須である『「モデルコアカリキュラム」のための英語プレゼンテーション演習』を実施し、平成 28 年度特別研究発表会において 2 分間程度の英語による発表が上記に基づく評価方法により実施された。平成 28 年度「応用英語Ⅱ」においても、専攻科 1 年学生 17 名を対象にして、『英語プレゼンテーション演習』を行った。平成 29 年度特別研究発表会においても、専攻科 2 年生となった 17 名による英語による発表を行う予定である。平成 29 年度「応用英語Ⅱ」においても、専攻科 1 年学生 23 名が「自己紹介」及び「研究内容」について英語プレゼンテーション演習を実施しており、平成 30 年度特別研究発表会においても、専攻科 2 年学生 23 名

による、上記に基づく評価方法に基づく 2 分間程度の英語による発表が実施される予定である。

5. 図書館における英語多読図書の推奨について

筆者は、図書館長の業務を担当して、今年度で 2 年目となるが、図書館は、英語多読を推奨し、英語多読図書を新たに準備した。

以下は、本校の『図書館だより第 56 号』の 4 頁に掲載した『「ライフシフト」と英語多読』という題名で、英語多読の必要性について論じた筆者のエッセイである。（以下引用）

次期学習指導要領で求められている教育のあり方として「予測できない未来に対応するためには、（中略）よりよい社会と幸福な人生を自ら創り出していくことが重要である」と記述されている。そのような未来においては、どのような能力が必要なのだろうか。

最近、イギリスの『ライフシフト』という本が話題になっている。副題は「百年時代の人生戦略」で、A I 等のテクノロジーが進化した未来においては、「イノベーション能力と創造性」、「共感などの繊細な対人関係スキル」、「どの分野でも役に立つ汎用スキル」が重要であり、それらを確立するためには、学習時における「自己効力感」と「自己主体感」の効果が大きいと述べられている。

「自分ならできるという認識」や「自ら取り組むという認識」が、現時点において学生には必要であり、これらの姿勢を身につけるために図書館では「英語多読図書」を導入した。一読することを勧める理由は三つある。

まず、「英語多読」は、多面的な思考を理解し、更に自ら考えることで、思考の再構築を行い、「イノベーション能力と創造性」を育成する一助とすることができる。

次に、「英語多読」は、多様な文化的差異を受容し、重層的な視点に基づく、世界への「共感」を覚えることを促すことができる。

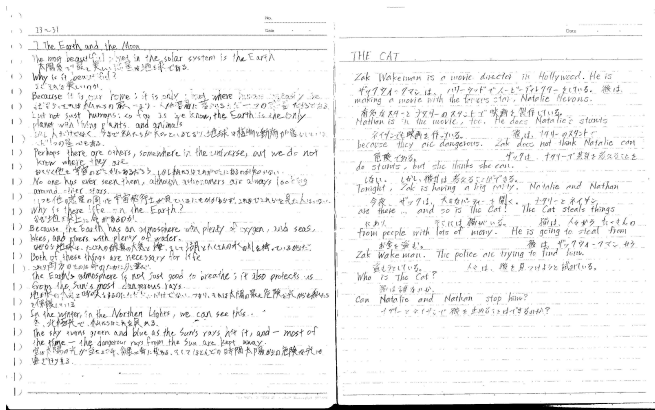
最後に、「英語多読」は、TOEIC Test 等の情報受信のみならず、英語論文等による情報発信を行うために、必要不可欠な過程であり、「汎用スキル」を向上させることができる。（引用終わり）

導入した Oxford Bookworms Library は、レベルが Starter Level および Stage 1 ～ Stage 6 の 7 レベルがあり、全てのレベルの図書を購入した。具体的には、本校の『図書館だより第 56 号』の 5 頁に掲載した

以下の 62 冊である。

- 1.Oxford Bookworms Library Starter Level : The Girl with Green Eyes Audio CD Pack を含め 10 冊。
- 2.Oxford Bookworms Library Stage 1 : Les Miserables Audio CD Pack を含め 10 冊。
- 3.Oxford Bookworms Library Stage 2 : Alice's Adventures in Wonderland Audio CD Pack 含め 10 冊。
- 4.Oxford Bookworms Library Stage 3 : Through the Looking-Glass audio CD pack を含め 10 冊。
- 5.Oxford Bookworms Library Stage 4 : Gulliver's Travels Audio CD Pack を含め 9 冊。
- 6.Oxford Bookworms Library Stage 5 : The Great Gatsby Pack を含め 7 冊。
- 7.Oxford Bookworms Library Stage 6 : Pride and Prejudice Audio CD Pack を含め 6 冊。

平成 29 年度は、2M 英語Ⅱを教科担当している
ので、夏休み課題として、学生は、教科書：
「Perspective English Communication II」第一学習社
の Lesson 6,7,8,9 の読解をすることとした。それに
加えて、「意欲的な学生」への任意の課題として、
英語多読図書 1 冊を選択し、読解することとした。
英語多読図書の任意の課題を提出した学生は、42
名中 5 名であった。以下は、左側が *Space* について
の翻訳の一部、右側が *The Cat* についての翻訳の一
部である。



6. まとめ

これまで述べてきたように、英検および TOEIC
Test への取組、AIU との連携に加えて、「グローバ
ル人材養成」のための CompTIA CTT+ ホルダ研
研修 FD、英語による英語授業、「モデルコアカリキ
ュラム」のための英語プレゼンテーション演習、図
書館における英語多読図書の奨励は、本校における

英語教育の特色ある取組であると考えられるので、
試行錯誤を重ねながらも、今後も可能な限り、活動
を継続して実施していく予定である。

参考文献

独立行政法人 国立高等専門学校機構
『モデルコアカリキュラム (試案)』
平成 24 年 3 月 23 日

独立行政法人国立専門学校機構
秋田工業高等専門学校

<http://www.ipc.akita-nct.ac.jp/index.html>
CompTIA

<http://www.comptia.org/>

<http://www.comptia.jp/>

福田誠治 「フィンランドは教師の育て方がすごい」
株式会社亜紀書房、(2009.3)

小林 貢 『「英語教育と e-learning」実践について
の一考察 --- 過去を踏まえた現在と未来への視座
から ---』秋田工業高等専門学校研究紀要 第 48 号、
pp.65-71. (2013.2)

小林 貢 『「英語教育と e-learning」実践について
の一考察Ⅱ --- 過去を踏まえた現在と未来への視座
から ---』秋田工業高等専門学校研究紀要 第 49 号、
pp.56-61. (2014.2)

小林 貢 『「英語教育と e-learning」実践について
の一考察Ⅲ --- 過去を踏まえた現在と未来への視座
から ---』秋田工業高等専門学校研究紀要 第 50 号、
pp.59-64. (2015.2)

小林 貢 『「ライフシフト」と英語多読』秋田工
業高等専門学校 図書館だより 第 56 号、pp.4-5.
(2017.7)